

ロシア・フォルマリズムの理論的發展と 1920 年代ソ連文学の論争状況の相関関係 についての研究

On the Theoretical Development of Russian Formalism and the Soviet Literature in 1920s

プロジェクト代表者：野中進（教養学部・准教授）

NONAKA Susumu (Faculty of Liberal Arts, Associate Professor)

1 研究の目的

ア) 研究の背景

1920年代ソ連の文学界で活躍し、構造主義にも強い影響を与えたとされるロシア・フォルマリズム運動については1960年代から国内外を問わず研究の蓄積が豊富であるが、ソ連崩壊後十余年を経てソ連文化研究の新しい問題意識と方法論が出揃ったのに対応して、ロシア・フォルマリズムに対しても新しいアプローチと問題設定が求められている段階にある。

イ) 全体構想および具体的な目的

ロシア・フォルマリズムの理論はしばしば体系的・整合的なものと捉えられがちだが、実際には当時のソ連文学・文化状況のなかの一要素として見なければその運動としてのダイナミクスは十分に説明することができない。ここではとくに、1920年代半ばから1930年代初頭にかけてのソ連の文学論争の状況を復元しつつ、そのなかでフォルマリストたちがどのような文学的・政治的な立場を占めていたか、それが彼らのこの時期の理論生成にどのように影響を与えていたかにしぼって研究したい。

・ 本研究の特色・独創的な点及び予想される結果と意義

ア) 学術的な特色・独創的な点

ロシア・フォルマリズムを再考するにあたり、彼らの置かれた時代状況を復元しつつ、その理論生成のプロセスを明らかにすることによって、従来「フォルマリストとアヴァンギャルド運動の連帯、フォルマリストと社会主義リアリズムの対立」というかたちで図式的に捉えられてきたフォルマリズム運動をより実態に即したかたちで復元することができるであろう。これが本研究の学術的な特色である。

イ) 予想される意義と成果

1920年代半ばから後半という、フォルマリズム運動史では比較的言及の少ない時期に研究の焦点を定めることによって、この時期の彼らの文学的・政治的立場に関する特徴を明らかにできるであろう。

・ 国内外の動向や自らの研究実施状況を踏まえた、本研究の位置づけ

ここ数年、ソ連文化研究の新しい視座を確立しようとする研究が国内外で行われている（例：グロイス『全体芸術様式スターリン』亀山郁夫訳、現代思潮社、2000年；桑野隆『バフチンと全体主義』東京大学出版会、2003年；Thomas Seifrid, *The Word Made Self: Russian Writings on Language, 1860-1930*, Cornell UP, 2005など）。本プロジェクトではこうした新しいソ連文化研究の成果を活用したい。

研究責任者自身、ロシア・フォルマリズムを代表する一人ヴィクトル・シクロフスキーの思想を1980年代まで射程を広げて扱った報告を2005年度（第55回）日本ロシア文学会研究発表会で行った（野中進「シクロフスキーにおける再認の概念」）。また関連題目で平成18年度科学研

究費基盤Cを獲得した。

2 研究の経過・成果の概要

前節で述べられた構想に沿って研究を進めた。ロシア・フォルマリズムおよびソ連の作家アンドレイ・プラトノフの分析を行い、期間中にはペテルブルグにおける資料収集も行った（出張旅費は科学研究補助金による）。

その結果として、次のような研究活動・成果が挙げられた。

1. 学術書評、2006年9月 *К.А. Баршт. Поэтика прозы Андрея Платонова. 2-ое изд., дополн. СПб.: Филологический факультет СПбГУ. 2005; Philip Ross Bullock. The Feminine in the Prose of Andrey Platonov. London: LEGENDA. 2005* の書評。『ロシア語ロシア文学研究』38号、143-146、日本ロシア文学会。
2. 一般向け書評、2006年11月 「フォルマリズムの快男児 [佐藤千登勢『シクロフスキイ 規範の破壊者』南雲堂フェニックス、2006年の紹介的書評]」、『望星』11月号、96-97。
3. 国際会議報告、2006年10月2日 「アンドレイ・プラトノフの文体的原理としてのカテゴリー・ミステイク」（ロシア語）、ロシア連邦アカデミー・ロシア文学研究所主催「第15回国際プラトノフ・セミナー」（2006年10月2-4日）にて。
4. 学会パネルディスカッション企画・司会、2006年10月26日 「『その後』のフォルマリストたち—ロシア・フォルマリズム再考」（中村唯史氏、長谷川章氏、佐藤千登勢氏、八木君人氏とともに）、日本ロシア文学会全国大会（於京都大学）にて。
5. 学術論文（査読付）、2007年1月 「シクロフスキイの『オプチミズムの探求』について—ジャンル、文学理論、時代へのコミットの観点から」、『ロシア語ロシア文学研究』39号、1-8、日本ロシア文学会。

期間中に獲得した外部資金

1. 平成18年度科学研究費補助金 基盤研究(C) 研究課題名「ロシア・フォルマリズム再考—新しいソ連文化研究の枠組における総合の試み」、研究代表者・野中進、2200千円。
2. 平成19年度科学研究費補助金 基盤研究(C) 研究課題名「ロシア・フォルマリズム再考—新しいソ連文化研究の枠組における総合の試み」（継続分）、研究代表者・野中進、1300千円。